

SKIPシティ国際Dシネマ映画祭2014

7.19(SAT)-27(SUN) SKIP CITY INTERNATIONAL D-Cinema FESTIVAL 2014



長編コンペティション部門『螺旋銀河』

草野 なつか監督 インタビュー

NEXT!
2014



—今回の作品『螺旋銀河』はシネアスト・オーガニゼーション大阪(CO2)の助成作品になります。その応募の経緯を少しきかせてください。

これまで自主で作品を制作してきましたのですが、今回のもとになる案がぼんやりとまとまりつつあるころ、知人がCO2への応募を薦めてくれて。ダメもとで応募したら、幸運にもうまくいって制作へとつながりました。



©Natsuka Kusano

—長編映画には今回が初めてのチャレンジ？

そうです。これまで作った作品はいずれも短編。ストーリーを特に設けなくて構成だけ考えて、その場の流れに任せて撮影していくみたいな実験的な試みをする極めて私的な作品で、理解ある知人と私を含む数人のミニマムな体制を撮ってきました。そういう感じでしたから、今回の作品に臨むまで、あまり自分が長編を撮るイメージを思い描いていなかった気がします。

—では、この助成が通ってなかったら、まだ長編に挑戦していなかったかもしれない？

たぶん。おそらく作品にはしたと思うのですが、以前と同じスタイルで短編か中編ぐらいで収まっていた気がします。これは自分の性格の問題なのですが、外的な力が介入しないと大きいことができない(苦笑)。無駄な気を使うので、できれば自分の身の回りで済ませたいというか、とにかく多くの人を巻き込みたくない(笑)。ただ、今回の場合はもう後戻りができなかった。CO2で撮るといことは大阪アジア映画祭で上映が決定しますし、スタッフも映画作りをしたい人が大勢集まってくる。この時点で大事で、私の一存で作品を頓挫させて上映中止とかありえない。完成させて上映するのが必須ですから、もう踏み切るしかありませんでした。

—ただ、経歴を拝見すると、大学時代、映画評論家の山根貞男さんの講義を受けて、その後、映画美学校に進んでと、着々と長編に臨む下地を作ってきたように傍から見ると映るのですが？

最終的にそこに行き着きたいモチベーションはあったと思います。ただ、まだ自分がその地点に立つことがイメージできなかったというか。CO2のこのチャンスがなかったら、踏み出せないでいたかもしれません。実は、山根さんの講義をとったのも偶然で。失礼なんですけど、最初は著名な映画評論家の方とまったく知らなかったんです。学科の歓迎会の席でお話してすごく楽しかったの、それでおもしろそうなので講義をとってみよう(笑)。でも、この出会いが大きかった。進路をおぼろげながら考え始めていたころ、山根さんに“就活とかしないの？”と訪ねられたんです。そのとき、いまだになぜそう答えたか不明なんですけど、私は“映画を撮りたいんです”と答えたんです。そうしたら山根さんに“あなたは向いているからやった方がいい”と言われて、その気になってしまったというか。

あと、大学3年生のとき、ダニエル・シュミットの追悼上映をみたとき、衝撃を受けて。“こんな映画が撮れたら幸せ”と思いました。この二つの出来事が映画の道を志す大きなきっかけだったのは間違いありません。

—作品について戻りますが、同じ会社で働く性格も容姿も正反対な綾と幸子の微妙に変化していく関係が描かれます。たとえば井口奈己監督の『犬猫』や、最近では坂本あゆみ監督の『FORMA』など、設定が比較的近い女性映画作家の作品がありますが意識するところはあったのでしょうか？

そういうことはあまり考えていませんでした。私は映画で第一に人間を描きたいのはあるんですけど、恋愛や男性についてはあまり興味がわかない。親子にしても母と娘とか、身内同士にしても姉妹とか、女性の関係性に興味がある。電車にのっていたりしても、ついつい女性のとる行動や車内でしている会話に目がいつてしまう。

—なぜ、そこに目がいくのでしょうか？

いままであまり深く考えたことはなかったのですが、たぶん自身の経験が大きいと思います。女性のコミュニティって独特で。たとえば男性と向き合っているときも、女性の目を常にどこかで気にしていなくてはいけません。いままであまり深く考えたことはなかったのですが、たぶん自身の経験が大きいと思います。女性のコミュニティって独特で。たとえば男性と向き合っているときも、女性の目を常にどこかで気にしていなくてはいけません。子供のころから、仲間はずれにならないためにはどうしたらいいとか、あの子に気に入られるにはこういうふうには振る舞わなければいけないとか考えていたりする。また、女性には男性と比べて特に二面性があるというか。たとえば傍からみると異常なぐらい仲のよさそうな二人が、互いがいないところでは互いのことを罵り合っていたりする。そういう居心地の悪さが逆に興味につながっている気がします。あと、実は私は女系家族。大学生のとき、父は他界していて、3姉妹の末っ子さんなんですけど、母や姉と向き合うとほんとうに女の人っておもしろいと思うんです。それが女性に目がいく理由なのかもしれません。



©Natsuka Kusano

—容姿端麗で上昇志向のあるシナリオ作家の卯の綾と、屋上でいつもひとりお弁当を食べている地味で存在感がない会社員の幸子。出会ったとき、二人の関係は明らかに綾が上で、幸子が下なのだけれど、そのパワーバランスがいつからか崩れていく。その時間の経過とともに刻々と変化する二人の関係性、女性の厭らしさや嫉妬心をうまく露出させる設定、女性心理が見事に反映されたセリフなど、実に考えられた脚本だと思いました。

脚本は『不気味なものの肌に触れる』や今秋公開の『最後の命』などを手掛けられている高橋友由さんとの共作になりますね？

たとえば幸子が綾に憧れて同じ服を買い、それを見た綾が幸子に嫌悪感を抱く。こういうシーンのアイデアは当初からあって。固執する側と固執される側の受けとめ方の違いや、実は正反対だと思っていたのに意外ある共通点といった女性ならではの心理や心の距離を物語に封じ込めればと考えていました。でも、私の場合はあくまでひとつのアイデアという点でとどまっていた、物語という線にできない。そこを助けてくれたのが高橋さんで。私の意図をもう汲み取る以上に汲み取ってくれて、うまくまとめてくれました。長編の脚本を書いたこともなかったのですが、ほんとうに高橋さんがいなかったら、ここまで自分が描きたいことを描けたかわからないです。

—コインランドリーという空間が彼女たちの主要な舞台になっていたのもユニークでした。

作品全体をみたとき、直感でコインランドリーがこの映画のひとつ顔になるなと思いました。だから、ことさらコインランドリーのシーンに関しては丹念に扱ったというか。中でも幸子がはじめてコインランドリーに行く場面は、ストーリーの流れ上でも極めて重要なシーンなので力が入りました。あと、シナリオが出来たとき、どう撮ればいいのか迷いが出たときがあつて。考え抜いた末に、新しい解釈が生まれたんです。それは場所の獲得にともなう人物の変化。自分の居場所がなかった幸子は屋上で綾に出会い、彼女の影響でコインランドリーというシェルターのような場所を獲得する。もう一方の綾も紆余曲折の末、幸子のシェルターとなったコインランドリーに足を踏み入れ、新たな居場所を見つける。そこでもコインランドリーがこの映画において重要な場であることを認識しました。

—振り返ってみて、今考えるのはどんなことですか？

これだけ大勢のスタッフと役者さんに囲まれたことは初めてだったんですけど、監督に課せられた使命はこれまでやってきた短編のときと変わることなくたったひとつ。“決断を下すこと”なんだなと思いました(笑)。また、映画は自分ひとりで作るものではなく、いろいろな人の力が入って出来上がる。この喜びを味わった機会でもありました。今はこう思っています。“自分のスキルを磨いてこれからも撮り続けていきたい”と。

—その作品が今度は国際映画祭で上映されることになります。

映画ってやはり観客の皆さんに見ていただいて成長すると思うんです。だから、こういうチャンスができてすごく楽しみです。どんな反応があるのかももちろん不安がないといったら嘘になるんですけど。

(取材・文 水上賢治)



監督：草野なつか

1985年生まれ。神奈川県大和市出身。東海大学文学部文芸創作学科卒業。在学中、当時同学科の特任教授であった映画批評家・山根貞男の講義を受講し、映画に興味を持つ。卒業後は映画美学校12期フィクションコースに入学。在籍中から自主映画の現場に制作などで参加。本作が初の長編作品となる。

長編コンペティション部門『螺旋銀河』 <2014年/日本/73分>

- 上映 7.22 (火) 17:00 SKIPシティ映像ホール
- 7.26 (土) 11:00 SKIPシティ多目的ホール

<STORY>

容姿も性格も正反対の綾と幸子。二人を繋ぐ不思議な運命。

綾は、シナリオ学校の課題を共著で仕上げなくてはならなくなる。綾がついた嘘をきっかけに、同じ会社で働く地味な幸子が共同執筆者となるが、作品が完成していくに連れ、二人の関係は微妙に変化していく。

監督：草野なつか

出演：石坂友里、澁谷麻美、中村邦晃、恩地徹、石橋征太郎